発行／一般社団法人
大丸有環境共生型まちづくり推進協会
企画／一般社団法人産業人文学研究所
文／ 吉村 克己

丸の内
地球環境倶楽部

2010.02.25

No.05

環境サロン
日本文化から学ぶ環境力

高度に発達した科学技術・巨大化した経済・複雑化した社会の課題解決の考え方を
日本文化から獲得し「環境力」を高める試み

Report

神田明神と江戸
～「ヌミノーゼ」を大切にしてきた日本人

清水 祥彦 氏

神田神社　祢宜
http://www.kandamyoujin.or.jp

祭は「神の訪れを待つ」こと

春日大社の若宮おん祭は、一一三六年から途切れることなく八七〇年以上も続いているが、江戸総鎮守である神田明神も一三〇〇年近くの歴史を持ち、二年に一度、五月には日本三大祭の一つである神田祭が連綿と行われている。

関ヶ原の合戦で当社が徳川家康公のための戦勝祈祷を行って以来、神田明神は徳川家・江戸幕府の崇敬する神社となり、神田祭は将軍・幕府縁起の祭とされて幕府御用の「天下祭」として重視され、絶えることなく続いてきた。二一世紀の東京のど真ん中で、昔ながらの神事を日本人が大事にしていることをもう一度考えて頂きたい。

お隣の中国は三〇〇〇年以上の歴史を持つといっても、王朝の断絶が続き、昔ながらの儀式や文化は継承されていない。朝鮮も同じだ。

日本においては春日大社のある奈良だけでなく、島根の出雲や九州の高千穂、東北など各地で古い祭礼が残り、文化と伝統を大切にしてきた。

ドイツの宗教哲学者であるルドルフ・オットーはその著書『聖なるもの』で、聖なるものへの畏怖の感情を「ヌミノーゼ」という概念で定義した。

オットーは「科学は、非合理性を徹底的に排除

することにより発展したが、人間の思考回路には非合理性が内在し、科学が進歩すればするほど、人間の直感的思考との間のギャップは広がる」と述べた。どんなに世界が発展しようと人間はこれからも、ヌミノーゼを抱き続けるのである。

我々日本人も、このヌミノーゼを再認識する必要がある。そして、神々や自然への畏れ、畏敬の念によって祭礼を続けてきたことを考えるべきだろう。祭とは「待つ」から由来しており、それは「神の訪れを待つ」という意味だ。祭は古代から連綿と受け継がれてきた神話的世界観を集団で確認する儀礼である。また、祭は文化でありアートでもある。神田祭は、神田・日本橋の人々による文化創造とコミュニケーションの場であり、洗練された都市の粋な文化だ。

シルクロードの終点として日本は、ペルシャや中央アジアの様々な文化を受け入れ、古事記や日本書紀の世界観を受け継ぎ、祭を通して再現しながら、すべての人々が宗教と意識せずに、喜びと安堵の実感を共有している。

天皇は祭を司る祭祀王として、今でも年間三〇回以上の儀式を執り行っており、二〇〇〇年以上もの間、歴代の天皇によって繰り返されてきた。

さて、それでは祭の主である神となんだろうか。語源はアイヌ語、朝鮮語という説もあるが、定説は「隠れ身」から転じたものとされ、生命力を見立てる信仰文化が背景にある。

神は英語では「god」と訳されるが、god は唯一創造神であり、日本の神とは異なる。むしろ、「noble spirit（高貴な霊）」あるいは「divine being（神聖な存在）」また、読み通り「kami（カミ）」と訳した方がいい。

アニミズムを持ち続ける日本人

一九世紀、イギリスの人類学者であるエドワード・B・タイラーは宗教進化論を唱え、「宗教は自然崇拝から死者崇拝や呪物崇拝（フェティシズム）を経て、多神教になり、そして最後に一神教へ進化した」と考えた。また、最も原始的で宗教の萌芽状態における、霊的存在への信仰を「アニミズム」（ラテン語の霊魂“アニマ”に由来）と命名した。

しかし、必ずしもアニミズムが宗教の初期過程とは言えないし、宗教を進化論では理解できない。

日本で巨木にしめ縄を飾るのは、アニミズムなのかヌミノーゼなのか。日本は、森林率が六八%とアメリカ三四%、ドイツ三二%、中国二一%など他国と比べて圧倒的に高く、山紫水明の国として生命の源である森を大切に守ってきたが、これもアニミズムのせいなのか？ 単なる宗教進化論では語れないだろう。

アニメーションもラテン語のアニマ（霊魂）から由来しており、生命のないものに命を与えて動かすことを意味する。日本人は『鳥獣人物戯画』の時代から漫画文化を築き、江戸時代には北斎漫画を描いた葛飾北斎という天才芸術家を生み出した。

現代でも宮崎駿という世界的アニメーターを輩出しており、ディズニーや欧米のアニメとは違うアニミズムから発するアニメ文化がある。

それは、ジャパンカルチャーとして世界に受け

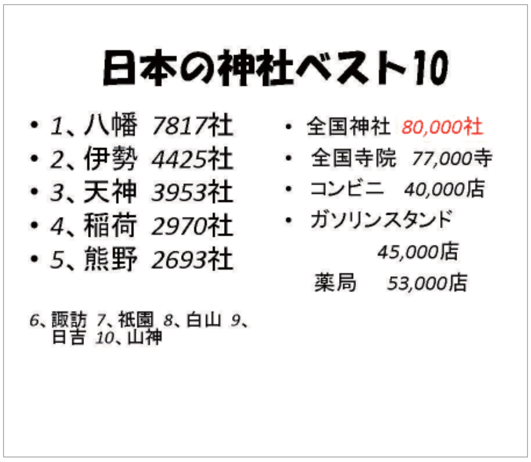

図１ 日本人の宗教観

入れられ、今ではクールジャパンと日本に対するあこがれも引き起こしている。

アニミズムかヌミノーゼかは別にして、日本は豊かな森を守り続けてきた。ヨーロッパにおいても古代やローマ神話の時代は、多くの神々が活躍した多神教の文化で、森を大切に守っていた。

ところがその後、文明が発展し、森が破壊され、はげ山になり、砂漠化が進む。やがて、砂漠で生まれたキリスト教という一神教が広がり、ローマ文明が衰亡し始めた。それまで、地中海には多くの民族、言語、宗教があって、ローマ帝国は多様な価値観を多神教の思想で維持してきたが、一神教を国教にすると、それを信じない人々は排斥され、ローマ帝国の繁栄は終わった。

ヨーロッパやイスラムなど一神教の神は、絶対者として君臨し、その偉容を知らしめることをもって唯一神となり、全知全能の起源となる。その結果、一神教同士がぶつかり合えば、宗教戦争となることは歴史で明らかだ。

しかし、東アジアや日本の神々はその数は多いのに、「あえて隠れている」ことが特徴である。日本の八百万の神々は奥ゆかしいのだ。

奥ゆかしすぎるせいか、日本人の宗教観は一見、希薄のように思える。「あなたは宗教を信じていますか」という質問には「信じていない」が七二%にも達する。ところが、一方で「先祖を敬う気持ちを持っている」が九四%、「盆やお彼岸のお墓参りに行く」七八%、「正月の初詣に行く」七三%もある。

日本人はヌミノーゼを色濃く持っていると言える。その証拠に日本には神社仏閣の数が多い。

神社は八万社、寺院が七万七〇〇〇寺もある。どこにでもあるように思えるコンビニが四万店、ガソリンスタンドが四万五〇〇〇店だから、いかに神社や寺が身近にあるかわかるだろう。ちなみに、都内の神社は一八〇〇社、寺院が三五〇〇寺で、コンビニは三七〇〇店だ。

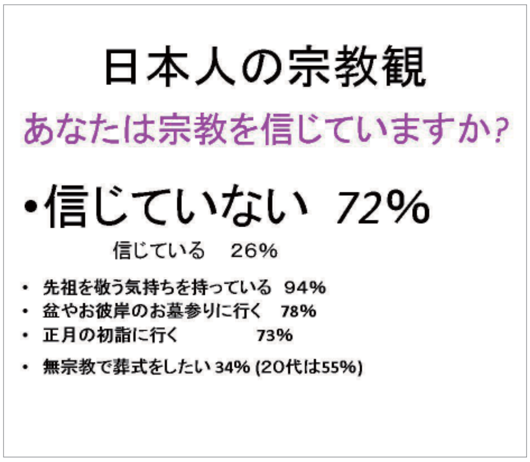

図２　日本の神社ベスト10

平将門を精神的支柱とした江戸っ子たち

神道には四つの価値観と倫理観がある。

〇敬神崇祖（神様を敬い、祖先を崇める）
〇浄明正直（清らかで明るく、正しく直き心）
〇共生（鎮守の森＝自然と、人と人との共生）
〇言挙げせじ（教義理論を頑なに説かない）

これは宗教というより、一つの文化の継承だろう。八百万の神々は多元的な価値観を共有しており、グレーゾーンを許容する。

ところが、一神教は白か黒をはっきりさせる。そのため、日本は主体性がない信仰・文化と誤解されている。だが、日本人は共生するためにジャンケンに「あいこ」というルールを作ってきたのだ。欧米はコインの裏表で勝ち負けを明確にしようとするが故に対立を起こしやすい。日本人は「あいこ」とアニミズムの文化をもっと誇るべきだ。

さて、最後に神田明神と江戸について簡単に触れておこう。神田明神は江戸総鎮守として、寛永寺、浅草寺と共に江戸城本丸の表鬼門を封じる位置に存在する。ちなみに、日枝神社と増上寺は裏鬼門を封じている。徳川将軍家のお墓も寛永寺と増上寺にあり、亡くなって後も表鬼門と裏鬼門を守っているわけだ。

神田明神は七三〇年に出雲氏族の真神田臣（まかんだおみ）により武蔵国豊島郡芝崎村に創建された。現在の大手町のど真ん中にある平将門公の首塚周辺である。その後、天慶の乱で活躍した将門公を葬った墳墓である首塚の周辺で天変地異が頻繁に起こり、人々が将門公の御神威によるものと畏れたため、時宗の遊行僧である真教上人が御霊を供養し、後に当社に奉祀された。

将門公はご存じのように平安時代中期の関東の豪族で、京都の朝廷に対抗して朝廷から排除された人々を庇護し、東国の英雄となるが、合戦で流れ矢にこめかみを射抜かれて討ち死にした。斬りとられた首は京都に運ばれ、さらし首となるが、『太平記』では、その首が何ヶ月も腐らず、関東を目指して空高く飛び去ったと伝えられている。その首が落下したのが大手町の首塚である。

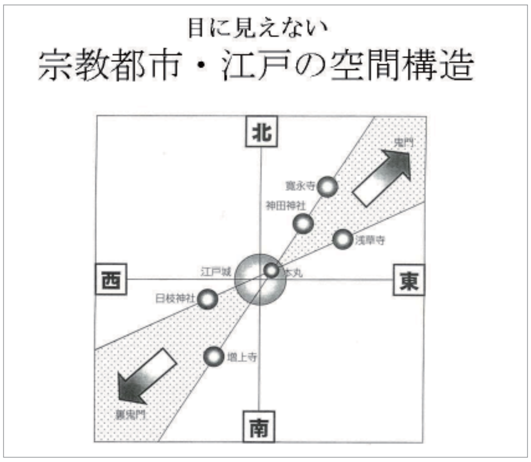

図３　目に見えない宗教都市・江戸の空間構造

将門公は以来、強きを挫き、弱気を助ける義侠心に富んだ英雄として江戸っ子の精神的支柱となる。権威者を嫌い、敗北者に共感する江戸の文化は将門公が原点だ。徳川家にとっては京都の朝廷に対抗するための守り神として将門公を大切にし、その将門公を祀る神田明神を重視したのだろう。実際、江戸城を中心に将門公の遺跡が広がっている。明治になって天皇政権絶対の中、将門公が逆賊扱いを受けるようになっても、神田祭は続いていたのだから、江戸の民衆パワーは力強いものだ。それが今も続いている。

神田明神は将門公だけでなく、祖霊の住む幽冥界を守護し、夫婦和合や縁結びの神様でもある大黒様と、商売繁盛・医薬健康・開運招福の神様である恵比寿様もお祀りしている。

また、神田明神は国学発祥の地でもあり、荷田春満（かだのあずままろ）が江戸に出て、神社社家の廷内で国学の教場を開き、賀茂真淵も学んだ。本居宣長と平田篤胤の曾孫は宮司を務めている。

ナショナリズムによって神社が誤解を受けることも多いが、政治と文化は違う。神社が長年の間、社会の安定装置として果たしてきた役割をもう一度、再認識してもらいたい。

欧米では資本主義の前提にプロテスタンティズムによる倫理がある。それでは日本の倫理観の原点はどこにあるか。それは、ヌミノーゼを背景にした祭礼文化にあると思う。企業の社会的責任としてのCSRにも必要な倫理観だ。

伊勢神宮では二〇年に一度、社殿を造り替える「式年遷宮」が連綿と続けられている。最新技術をあえて取り入れず、古代人の伝統的な建築方法を意図的に守ってきた。ギリシャのパルテノン神殿は永遠の存在を祈って造られたが、今は観光施設に過ぎない。しかし、スクラップビルドを繰り返してきた伊勢神宮は今も生きた宗教施設として常に蘇り続けている。

中世の伊勢神道では「元々本々」（はじめをはじめとし、もとをもととする）という考えが重視された。これは、謙虚に現実を見つめ、原初に回帰して、原点に戻る姿勢の大切さを語ったものだ。

唯物論が横行する中で、日本人はヌミノーゼの感覚や、祭礼への思いを見直し、元々本々の姿勢を取り戻してほしいものだ。